

乳児死亡ゼロ
50周年の集い

多彩にいのちの記念行事

昭和37年、旧沢内村が全国初の乳児死亡ゼロの金字塔を樹立してから今年50周年を迎えました。

それを記念してNPO法人「深澤晟雄の会」と同「いのちネット」を中心に実行委員会を組織して7月22日に記念行事を開催することになりました。

第3回文化賞は

元病院長2氏に

第3回いのちの灯文化

賞贈呈式が午前10時から深澤晟雄資料館前で行われます。今年受賞者は元沢内病院長の加藤邦夫氏と増田進氏に贈られます。

50周年の集いは

沢内バーデンで

会場を沢内バーデンに移して11時から「乳児死亡ゼロ50周年の集い」が行われます。

①いのちの鼓動

みちのくみどり学園生による太鼓演奏で開幕。

②いのちを刻んで50年

50年の歩みを西和賀町保健師が報告

③歴史の証言

元沢内病院長の加藤邦夫

氏と増田進氏のスピーチ

～昼食後 1時から～

④いのちの行政に学ぶ

岩手看護短大・鈴木るり子先生、三育学院大・名原壽子先生が語る教師の視点

⑤いのちの行政を今に

昭和37年生まれの町民とその親世代、その子世代が語る「生命行政に生きて」

⑥記念講演

「生命尊重と後方支援」
遠野市長・本田敏秋氏

⑦講演「いのちの山河」

外山光子さんとコーラス
リリシヤンの合唱で閉幕

昼食はおにぎりを会場

でお求めできます。どなたも都合の良い時間帯で無料

で参加できます。皆様のご来場をお待ちします。

講演で「いのちの山河」

50周年記念式で社会人講師・山中紅香さん（写真）の講演「いのちの山河」が披露されます。

山中さんは沢内新町の出身で東京在住の本名は幸子（芸名とも「こうこ」です。以前から及川和男著「村長ありき」を読んで講談で演じたいと考えていました。映画「いのちの山河」に刺激されて本格的に作品作りを思い立ちました。実家の近隣に住む元保健婦の高橋ミヨさんをお呼びいたします。

イメージして「保健婦が語る深澤晟雄物語」として30分ものに仕上げました。作品を映画の大澤監督に聴いてもらったら、感動を込めて「映画の題名をそのまま使つてよい」との許可を得ました。及川和男さんにも原作は「村長ありき」であることの快諾を得て作品が完成しました。

当日は入場無料ですが、公演途中の入場はできませんので、ご来場はお早め



「故郷で『いのちの山河』を心を込めて演じたい」と語る山中紅香さん

村田源一郎氏(岩手日報社相談役)に聞く ①



「書かざるの記」と

深澤村長の記憶

聞き手／深澤晟雄の会副理事長 佐々木 孝道

＜村田源一郎氏略歴＞

昭和7年4月 花巻市大迫町生まれ
岩手大学農学部林学科卒業
昭和30年4月 岩手日報社へ入社
昭和33年10月 同社北上支局長に
昭和36年8月 同社本社へ
平成8年6月 同社代表取締役社長に
8年間務めた後、代表取締役会長を経て
平成22年6月 同社相談役に就任、
永年に亘り言論機関の経営に携わる。



村田記者に「記事にしないでくれ」と村人と共に懇願する深澤村長。(劇団銅鑼「燃える雪」の舞台から)

麻薬中毒医の診療

記事取り下げ懇願

佐々木 村田さんと深澤村長との出会いは、沢内病院の麻薬中毒医師の取材がきっかけだったそうですね。

村田 そうですね。僕が北上支局に赴任したのは昭和33年10月でした。26歳の支局長で沢内に行ったこともなかったし、何も分からずに赴任しました。着任して2、3日したとき、沢内村の病院に医者2人いるんだが、一人は猪原という院長で、もう一人の医者は麻薬中毒でして、中毒患者が患者を診てはまずいんじゃないかという噂が北上で出たんですよ。要するに沢内の人が北上に来て話したのが僕の耳に入ったというわけですね。それで僕は取材に沢内を訪れた。

佐々木 スクープ記事の取材という感じですが、沢内病院では麻薬中毒の先生にも会いましたか。

村田 会いました。そのお医者さんに会ったら「確かに私は中毒です。辞めます。」と言うんですね。

猪原院長は困ったような顔をしていました。それから役場に行ったら

村長が出張でいなかったので助役と話をしました。そして、その晩は湯本温泉に泊まって原稿を書いて、翌日の夕刊に送ることにしたわけです。

佐々木 及川和男さんの「村長ありき」の本では、そこに深澤村長が訪ねてくるんですが、本当にそうだったんですか。

村田 そうです。原稿を書いているところに夜の10時ごろ、深澤晟雄さんが訪ねてきて「記事にしないでもらえないか」というんです。「今の沢内は医療改革をいろいろやっている。そういう中で、欠陥的医師を採用したこともさることながら、これが表に出ると沢内に医者が来なくなる」と言うわけです。

それで僕は「いや、その事情は分かるけれども、今辺地の無医村地帯に医者と呼ぶべくいろいろな努力がされている。もちろん新聞社も辺地医療振興の考え方なので、この記事はプラスの方向になるように書きまします」といったら、一旦引き上げていったんですが、またきたんですよ。1時ごろだった。しかし、僕と二人の議論は平行線だった。

(つづく)